

ニホンザル管理の基本—群れ管理と地域主体の被害対策—

兵庫県立大学 山端直人

講演要旨

ニホンザル（以下サル）は登る能力などの身体的能力が高く、学習能力も高い。昼行性のため被害現場を目視しやすい。そのためサルの被害は深刻に受け取られることが多い。「サルは賢いから何をしても防げない」「サルだけは何をして無理」という声が被害現場では根強い。しかし、その生態的特徴を踏まえた効果的な被害対策が開発・普及は進展しており、同時に群れ単位で個体数を管理する手法や実践例が積み重ねられつつある。対策が実践されている地域では、群れの保全も可能にしつつ、被害を大幅に低減させることにも成功している。

1 ニホンザルの管理に役立つ基本的生態のポイント

基本的な生態的特徴からサル管理に必要なポイントを知ることができる。

(1) 群れを作る

メスを中心とした母系血縁集団を作る。多い時には群れの頭数は100頭を超える。

(2) 安全で採食可能な場所を求めて移動する

群れは遊動域内で条件の良い採食場所を探すために移動しながら暮らしている。条件の良い採食場所とは、群れ全体が「安全」かつ「十分」に採食できる場所である。

(3) 広い遊動域を持つ

条件によっては100 km²以上の広い遊動域を持つ。サルはこれらの場所で採食しながら群れで移動する。つまり、群れが好まないような場所や集落であれば、群れは他のエサ資源を選んで移動するため、出没頻度、被害も減少する。

2 生態的特徴を踏まえた管理のポイント

これらの生態的特徴を踏まえた、サル管理の要点を以下に記す。

(1) 群れ単位の頭数管理

個体レベルではなく、「群れ」を管理の対象とし、被害の状況や群れの加害レベル、群れの位置する空間的な背景等を考慮し管理する。必要に応じて群れの除去（全頭捕獲）や頭数の削減（部分的捕獲）、悪質個体の選択的な捕獲などの手段を検討する。

(2) 地域主体の被害管理

群れが好まない集落や農地の環境を整える（防護柵や追い払い、誘引物の除去など）ことで、集落や農地の利用価値を下げる。集落や地域が主体的に被害対策を進める必要がある。

(3) 群れ管理と被害管理を両輪とする政策

上の2つを適切に組み合わせて対策に当たることで、群れの管理と被害の低減を両立させることができる。そのためには地域の被害管理への主体的参加を促すとともに、群れ単位の頭数管理を計画的に進めるための政策とその着実な実行などの機能が重要である。